立命館守山中学校・高等学校　2022 年度　学校目標　年度末報告シート

教育目標

基本目標　：立命館の**建学の精神「自由と清新」、教学理念「平和と民主主義」**を体現し、本校が目指す「新たな価値やルールを生み出し、社会に変化や希望を与えることができる『**ゲームチェンジャー**』」を育成する。

重点課題　：**「４つのスキル」の獲得（４Cs＝ゲームチェンジャーが獲得すべきスキル）**

① Critical Thinking　(批判的思考)
② Creative Thinking　(創造性)
③ Communication　(コミュニケーション)
④ Collaboration　(協働)

中長期の目標

■入試課題

Ⅰ. ゲームチェンジャーの素養を備えた生徒の獲得（学校ブランド力の強化）：
制度改革と広報強化による安定した入試の実現

■教学課題

Ⅱ−１. 自律した学習者を育成する質の高い教育の展開：
自律した学習者を育成するカリキュラムや評価システムの改善

Ⅱ−２. 特色ある教育プログラムの推進・高度化
探究・グローバル・サイエンス・フロンティア教育の推進・高度化

Ⅲ. 社会や世界とつながり、自己実現できる力の育成：
ルールメイクや社会参画を通して自己実現を目指す体験機会の充実

■管理運営課題

Ⅳ. ゲームチェンジャーの育成を実現する学校教育力の高度化：
教職員の教育力向上、保護者との連携、安心・安全な環境づくり

Ⅴ. 保護者や地域・社会に開かれた学校づくりの推進：
保護者、地域から信頼され、互いに協力できる関係づくりの推進

■将来構想課題

Ⅵ. 2030 チャレンジデザイン課題の推進：
学びの内容・方法・空間の改革、20 周年記念事業の企画・立案

2022 年度の教育活動方針

■入試課題

Ⅰ. 制度改革と広報強化による安定した入試の実現：
（1）志願者・入学者の安定的確保を目指す入試制度改革
（2）広報 Web 化の推進、教育成果発信の充実

■教学課題

Ⅱ−１. 主体的な学び・姿勢を育成する質の高い教育の展開：
（1）確かな学力の定着を目指す指導の確立と成果創出
（2）主体的な学び・姿勢を育成する評価への転換

Ⅱ−２. 特色ある教育の充実、社会やキャリアと結びついた探究的学びの充実：
（1）【超・探究】社会やキャリアと結びついた探究・社会実装の学びの高度化
（2）【グローバル】マインドを鍛えるグローバル教育の推進
（3）【サイエンス】理数・科学教育の高度化、SSH 研究事業の成果創出
（4）【フロンティア】自らキャリアを切り拓く力の育成

Ⅲ. 主体的に社会に参画する姿勢や能力を育成する体験活動の充実：
（1）当事者意識を育成する体験活動の充実
（2）生徒に意思決定させるルールメイク機会の充実

■管理運営課題

Ⅳ. 教職員の力量向上と教職員を支える環境の向上：
（1）自己研鑽と組織的支援による学校教育力の高度化
（2）働きがいのある職場環境づくり・働き方改革の推進
（3）安心して学び、能力を発揮できる環境づくり

Ⅴ. 保護者や地域・社会に開かれた学校づくりの推進：
（1）学校と保護者・地域が共に学び、育ち、協力できる関係づくりの推進

■将来構想実現課題

Ⅵ. R2030 チャレンジデザイン課題の具体化と実現：
（1）学びの内容・方法の改革
（2）教育 DX の高度化
（3）学びの空間の改革

（4）20 周年記念事業の企画・立案

■入試課題

Ⅰ．制度改革と広報強化による安定した入試の実現（学校ブランド力の強化）

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
(1)	制度改革と広報強化による安定した入試の実現	①	安定的な受験者確保を実現する入試制度の改革	◎
		②	広報 Web 化の推進、教育成果発信の充実	◎
		③	生徒・保護者の教育満足度（インナー評価）の上昇	◎

■教学課題

Ⅱ−1．（重点１）主体的な学び・姿勢を育成する質の高い教育の展開

(1)	確かな学力の定着を目指す指導の確立と成果創出	①	主体的な学びを育成する系統的カリキュラムの構築	○
		②	生徒授業評価アンケートの数値上昇、目標の達成	◎
		③	外部模試における各学年・コース目標の達成	○
		④	放課後自習室の開設（中学 atama＋寺子屋、FT 受験対策）	◎
(2)	主体的な学びの姿勢・意欲につながる評価への転換	①	主体的に学びや姿勢を育成する評価法の見直し	○
		②	高校グローバル内部推薦の選考方法や基準の見直し	◎
		③	教科・コースにおける評価基準の斉一化	○

Ⅱ−2. 特色ある教育の充実、社会やキャリアと結びついた探究的学びの充実

(1)	特色ある教育プログラムの推進		全体	特色ある教育プログラへの肯定的評価の上昇	◎
		【超･探究】探究・社会実装の学びの高度化	①	探究型の授業実施率の向上	○
			②	社会課題の取組件数、成果発信、外部コンテストによる成果創出	◎
			③	文社探究・理数探究に対する高大連携支援の充実	○
		【グローバル】マインドを鍛えるグローバル教育の推進	①	オンライン×リアル研修プログラムの充実	◎
			②	海外研修プログラムの新規開発・実施	◎
			③	英語運用能力の向上、英語コンテストによる成果創出	○
		【サイエンス】理数・科学教育の高度化、SSH の成果創出	①	SSH 研究事業「中高大一貫した課題研究ストリーム」実現	◎
			②	地域・企業との連携、高大連携の新たなモデル創出	○
			③	理工系内部進学者数の増加	△
		【フロンティア】自らキャリアを切り拓く力の育成	①	国公立大学・医学部への現役合格者数の増加	◎
			②	キャリア教育と連動した新規研修（海外・国内）の開発・実施	◎

Ⅲ. 主体的に学校づくりに参画する姿勢や能力を育成する体験活動の充実

(1)	当事者意識を育成するリアルな体験活動の充実	①	学校行事、部活動における生徒活動機会の再開、充実	◎
		②	生徒の手による自主的活動・行事の実施、活性化	○
		③	地域交流・社会貢献活動への積極的参加、リーダーシップ発揮	◎
		④	生徒・保護者の「行事・部活動満足度」の上昇	◎
(2)	生徒に意思決定させるルールメイク機会の充実	①	生徒会執行部と校長による協議会の定期開催	◎
		②	生徒主体・対話中心のルール見直し、学校づくりの実現	○
		③	生徒会の力量向上を目指す組織・活動の見直し	△

■管理運営課題

Ⅳ. 教職員の力量向上と教職員を支える環境の向上：

(1)	自己研鑽と組織的支援による学校教育力の向上	①	次世代教員養成を目的とした校内研修の充実	◎
		②	ICT 教育スキルの向上、全国初ロイロスクール認定の取得	◎
		③	教育実践や成果の学外発信、公開研究会の開催	△
		④	生徒授業評価、保護者「授業・生徒対応満足度」の上昇	◎
(2)	働きがいのある職場環境づくり	①	外部専門人材の活用、大人定数コンセプトによる教職協働の実現	◎
		②	分掌組織の改編、業務の合理化・再整理の推進	○
		③	クラブ改革を軸とした超過勤務削減の取り組み推進	○
(3)	生徒が安全・安心して学べる環境づくり	①	日常コミュニケーション充実１（生徒情報交流の充実）	◎
		②	日常コミュニケーション充実２（教職員の声掛け、挨拶励行）	○
		③	教職員チーム対応力強化（委員会の充実、保健室の人的補強）	◎
		④	中高時差登校の実現（JR 守山駅の混雑解消）	◎

Ⅴ. 保護者や地域・社会に開かれた学校づくりの推進：

(1)	保護者とのコミュニケーションの充実	①	PTA 各学年委員との定期懇談会の開催	◎
		②	教師と保護者が協力して「生徒の育ち」を支える研修の実施	◎

■将来構想課題

Ⅵ.2030 年に向けた新たな学校づくり

(1)	【カリキュラム】学びの内容・方法の改革	①	４Cs スキル定着を意識した学びと評価の見直し	○
		②	高校制度改革の具体化と広報時期の検討・実現	○
(2)	教育 DX の高度化	①	新高１タブレットと PC 端末の併用実現（2023 年度）	◎
		②	全館ネットワーク整備（通信スピード向上、WiFi6 対応化）	◎
		③	教員 PC 端末更新、セキュリティ対策の強化	◎
		④	LMS（学習履歴の蓄積・活用）システムの構築	△
		⑤	メタバースキャンパス・保健室の実現	○
(3)	【施設･設備】学びの空間の改革	①	中学棟のラーニング・コモンズ化具体化	◎
		②	タブレット・PC２台利用、机・椅子の新調	◎
(4)	20 周年記念事業の準備	①	記念事業やイベントの立案・具体化	△
		②	学園創立 125 周年記念行事との連携	△

達成状況

■入試課題

Ⅰ.制度改革と広報強化による安定した入試の実現

2023 年度の中学入試は、昨年度実施した AD アドバンスコース（GL・FT 接続コース）名称変更の効果もあり、過去最高の 841 名（倍率 5.28 倍）の志願者となりました。高校入試は、推薦の成績基準を上げ、人数枠を設定するなどの改革を推進、高い資質を備えた生徒の獲得を目指しました。その結果、志願者は 373 名（昨年度 572 名）と一時的に減少しましたが、入学者の学力レベルは大きく上昇、県外志願者も 129 名（34%）に増加しました。また、保護者アンケートでは、「子どもを入学させてよかった 88.8%」「他人にも薦めたい学校である 83.4%」との高い評価を得ており、中学や塾からも「関西で最も伸びている学校」として大きな注目を集めました。

■教学課題

Ⅱ－１．主体的な学び・姿勢を育成する質の高い教育の展開

（１）個別最適な学びによる学力の定着

中学では、生徒一人ひとりの理解度や到達度に応じた個別最適な学びの実現を目指し、本年度も「atama plus 株式会社」と共同した実証研究を進めました。また、学習支援策として「株式会社トモノカイ」と提携、中学（atama+活用した基礎対策）と高校 FC フロンティアコース（受験対策）の希望者を対象とした放課後学習講座を開講させました。検証の結果、生徒満足度や学習効果が高かったことから、次年度から高校 AM・GL コースにも対象を拡大する予定です。

（２）主体的な学び・姿勢を育成する評価への転換

2022 年度は、「生徒の主体的な学び」の実現に向け、従来の定期テストを軸とした学習指導や学習評価の割合を減らし、観点別評価（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点）や日常のパフォーマンス（課題、レポートなど）を評価する方向へと大きく転換しました。新たな評価法は、単元や題材のまとまりなどの「短いスパンでの学習評価やフィードバック（事前に何を学ぶのか、どのような観点で評価するのか、どのような提出課題があるのかを生徒と共有）が行えるため、生徒がその評価を学習改善につなげやすいメリットがあります。この評価法の転換により、生徒に授業中の活動や家庭学習を大切にする姿勢が向上するなど、明らかな変化が現れはじめています。

Ⅱ－２.特色ある教育の充実、社会やキャリアと結びついた探究的学びの充実

（１）社会実装を目指す学びの推進

本校「共創探究科」教員と立命館大学教員、企業が連携した独自の探究プログラム授業を通して、学びの成果の社会実装や学外コンテストに挑戦させる指導の強化・充実を図りました。2022 年度もびわこキャリアチャレンジコンテスト最優秀賞、日経 STOCK リーグルーキー賞（全国６位）、JICA 高校生エッセイコンテスト審査員特別賞（全国 10 位）、高校生ものづくり・ことづくりコンテスト最優秀賞をはじめ、理系でも日本地球惑星連合大会ポスター発表（優秀賞）、日本陸水学会全国大会招待研究発表（優秀賞）、サスティナビリティー・ソーシャルアントレプレナーシップ CAMP（特別奨学生枠で研究発表）など、全国規模のコンテストで入賞する生徒が数多く出ました。また、教育機関向け探究学習コンテンツを提供する会社を起業した生徒、自ら開発した和菓子を商品化、実店舗での販売を実現した生徒など、みずから培った能力やスキルを生かし社会貢献する事例も出現しています。

（２）ポストコロナ期における新たな海外交流

ポストコロナ期を見据え、生徒の海外派遣プログラムを復活させました。同時に、海外派遣・交流を活性化させるため、中学の長期ターム留学（カナダ・オーストラリア各３ヶ月）、高校の海外研修プログラム拡大（エストニア、ニューヨーク）を新たに実施しました。一方、コロナ禍で成果を上げたオンライン交流を継続することで、海外渡航が困難な生徒にも、より多様な交流機会を提供できるよう努めました。リアルとオンラインの相乗効果により実渡航者は 564 名に達し、オンライン国際交流参加者も 577 名（対前年度 140%）に増加しました。カナダの高校卒業資格が取得できる「オンライン・ダブル・ディプロマ・プログラム」は、2 名の受講者が資格を取得、オランダのライデン大学にも１名が合格しました。

（３）第３期スーパーサイエンスハイスクール研究事業

第３期スーパーサイエンスハイスクール（SSH）は、５年間の研究事業が終了しました。研究テーマである「課題設定能力の育成を目的とした中高大院連携でつくる科学探究ストリームの構築」に取り組み、中１「琵琶湖学習」から高３「理数探究Ⅱ」までの中高６年一貫した探究学習プログラムを完成することができました。また、高３早期大学履修プログラム「サイエンス AP」では、大

学キャンパスやラボで大学教員や学生・院生から専門的指導を受けたり、共同で研究する機会を設けたりすることで、生徒の課題研究やプロジェクトの学びを一層充実させることができるようになりました。次年度以降は「SSH 認定枠」を取得、サイエンスの枠を超えた教科横断的、異分野融合的な学び、リアルとバーチャルを融合した最先端の学びの実現を目指します。

（４）高校フロンティアコースの進学実績

高校フロンティアコース（FT コース）は、滋賀医科大学や朝日新聞社との連携講座、東京やニューヨークでの体験型研修を通して、学ぶことや働くことの意義や目的を考え、進路選択する力を養う独自のキャリア教育に取り組みました。2023 年度大学入試では京都大学２名、大阪大学１名、滋賀医科大学４名（医３名）など、大変高い実績をあげることができました。国公立大学や医学部医学科への現役合格者は 17 名、合格率も 50%（国公立前期日程合格率 70%）に達しました。

Ⅲ. 社会に主体的に参画する姿勢や能力を育成する体験活動の充実

（１）課外活動の高い成果、外部人材活用による活動の充実

中学のアメリカンフットボール部が甲子園ボウル初出場、女子硬式テニス部が全国私学大会優勝、吹奏楽部が関西大会銀賞、サイテック部（ロボカップ）が全国大会３位、個人競技のウィンドサーフィンが世界大会出場しました。高校はバトントーワリング部、女子陸上部、アメリカンフットボール部、男子軟式テニス部、将棋部、美術部、サイテック部が全国大会、吹奏楽部、男子バスケット部、水泳部が県大会で優勝、硬式野球部、サッカー部は県大会で準優勝しました。コロナ禍による制約の多い条件下でも、生徒は目標を見失うことなく努力や工夫を重ね、高い成果を上げました。また、クラブ活動指導員を 15 名に増員、新たに３クラブを外部業者委託とし、専門的な指導が受けられる環境を整備し部活動の充実を図った結果、当該クラブの生徒や保護者の満足度が大きく上昇しました。また、「Life is Tech」社と連携したオンライン部活は、ネットを通じて専門的な指導が受けられる、全国の仲間と交流できると生徒にも大変好評です。

（２）生徒に意思決定させるルールメイク機会の充実

「社会通念上、誰もが納得し運用しやすい校則」の観点から、必要な見直しを行いました。また、中学では、生徒が主体となり、保護者や教職員と対話しながら「携帯電話の持ち込み自由化」を実現する取り組みを進めました。これらの活動を通して、「自分たちの意見が尊重されている」「自分たちの意見が学校をより良くできる」と考える生徒が増加しました。

■管理運営課題

Ⅳ. 教職員の力量向上と教職員を支える環境の向上

（１）教員の教育力・指導力の向上

本校が目指す「学びの立命館守山モデル（R-Style）」の実現には、教員の高い専門性と生徒を支援するファシリテーター的な役割がますます重要になるため、公開授業週間（年２回）や各分野の研究者・専門家を招聘しての校内研修（探究アドバイザー研修３回、次世代教員対象研修３回）を実施しました。「ロイロ認定ティーチャー」資格は 80%超の教員が取得、全国初となる「ロイロスクール」認定につながりました。また、教職員のモラル向上を目的とした服務規程やハラスメントに関する研修も実施しました。

（２）働き方改革の推進

今年度も教育の質的向上と持続可能な指導・運営体制の実現を目的とした働き方改革を実施しました。具体的には、①校務分掌体制の見直し、②外部人材の積極的活用、③業務内容の精選、④勤務管理の徹底の４つを柱に取り組み、教職員の業務の効率化、意識改革に高い成果を上げることができました。新たに導入したチーム担任制は、生徒の成長発達段階や学年の状況、課題に応じて、固定担任制やブロック担任制も可能にするなど、一定の検証期間を経て、より効果的な指導が行える形態に変更しました。また、スクールサポートスタッフを６名に増やし、教職員が本来すべき業務や生徒対応に専念できる環境づくりにつとめました。

（３）安心・安全な学校環境づくり

本年度は、感染症対策を講じながら、可能な限り教育活動（授業や部活動、行事活動など）を実施し、生徒の健やかな学びと健康を保障する方針を取りました。保護者アンケートでも、「学校行事が楽しく充実している 86.3%」と前年度から 26.2%の高い伸びを示しました。しかし、長期化するコロナ禍の影響により、保健室来室数が前年度比で中学 164%（1122 名）、高校 138%（1586 名）に増加、特に健康相談の増加が顕著なことから、相談・対応体制のより一層の強化が急務の課題となっています。そのため、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーに加え、養護スタッフを３名に増員することで、保健室の体制を強化しました。また、中学（8：20）・高校（9：20）の始業時間に時差を設定し、JR 守山駅の慢性的な混雑を解消、生徒の利便性を飛躍的に向上させることができました。

Ⅴ. 保護者や地域・社会に開かれた学校づくりの推進：

PTA 学年委員と学校執行部が、定期的に懇談する機会を持ちました。互いに学校の教育方針や生徒の様子、学校への要望などについて気軽に意見交換できる場となったことから、次年度も継続を望む声が多く出ました。また、「共に学び、育ち、協力できる関係づくり」を目的とした保護者対象の「親業」講演会を開催、参加者からは好意的な評価を得ることができました。

■2030 将来構想課題

Ⅵ. 2030 年チャレンジデザインの具体化

（１）学びの内容・方法の改革

2030 年を見据えた教育将来構想計画「立命館守山チャレンジデザイン」「Game Changer の育成」を目標に、従来の「学びの内容・方法」を大きく変革する「学びの立命館守山モデル構築」課題の具体化を進めました。社会とつながった探究学習やアウトプット、個別最適な学びへの転換を目指すカリキュラム改革、主体的な学びの意欲や姿勢を育成する評価の見直しに取り組み、生徒の変容につながる高い成果を生み出しています。

（２）ICT 教育から教育 DX への転換

デジタル・AI 技術を活用した教育の高度化に向け、新高１（23 年度入学生）から、タブレット端末とパソコンの一人２台併用す

る新たな学びを展開します。また、全館のネットワーク速度を５倍に向上、アクセスポイントも Wi-Fi６対応としました。他方、教職員の貸与PC端末を更新（WindowsOS又はMacOS）、セキュリティ対策として、全端末のモバイルデバイス管理（MDM）、管理・登録した端末以外は学内ネットワークにアクセスできない仕様への変更を行いました。さらに、今年度から学習管理システム（LMS）やメタバースキャンパス・保健室の構築を目指した実証研究を開始しています。

（３）新たな学びに対応した施設・設備の改修

「探究的な学び」や「個別最適な学び」に対応した施設・設備改修として、中学棟廊下のラーニングコモンズ化、教室との境界壁をガラス窓にする工事を予定しています（2023年度着工）。また、机と椅子を新調し、高校から順次入替えを行っています。

（４）20周年記念事業の企画検討

2026年の立命館守山開校20周年記念事業として、アイリスグラウンドの改修を予定しています。立命館学園125周年記念事業との連携やその他の企画については、その立案、具体化が課題となっています。

改善策

■入試課題

〇入口（入試）から出口（生徒の成長・進路）までを見通した入試戦略の構築

（１）広報の充実…Web化の推進、生徒の学習・活動の成果発信、内部進学制度の可視化・他大学進学実績の向上

（２）入試制度改革…日程や選考方法の一部変更、コース・クラス規模の適正化

■教学課題

〇2030将来構想に掲げる「学びの改革実現」＝主体的に学び・行動する生徒を育成する評価と活動の確立

【重点１】自律した学習者を育成する評価法の確立

（１）生徒の学ぶ意欲を引き出す授業の高度化と成果の創出

①「使える」学びへの改革、②基礎と探究の融合・循環、③外部人材・AIの活用、④社会参画・多様な学びの提供

（２）自ら主体的に学ぶ姿勢を育成する評価法の確立

①評価方法の見直し（定期テスト評価から多面的・継続的評価へ）、②学習成果の可視化

【重点２】高い当事者意識を持つ生徒を育成する学校文化の醸成

（１）行事活動の充実と高い学校文化の醸成

①生徒が主体となる活動の充実、②生徒会・委員会組織の強化

（２）学校づくりに参画する姿勢を育成する活動の充実

①生徒に意思決定させるルールメイク機会の充実

■校務運営課題

【重点３】教職員の教育力向上、保護者との連携、安心・安全な環境づくり

（１）教員を支え、教育力を高める環境づくり

①指導力・授業力の向上を目指す研修の充実、②コミュニケーションによる組織強化、③働き方改革の推進

（２）保護者との連携、安心・安全な環境づくり

①生徒との信頼関係の充実、②保護者との連携の推進

■将来構想実現課題

〇2030将来構想中長期課題の実現

（１）2023年度課題の推進…①評価法の見直し、②中学棟の改修、③高校制度改革の見直し、④学習履歴管理システム（LMS）、メタバースキャンパスの実証研究、⑤高校タブレット・PC２台活用の成果創出

（２）20周年記念事業の企画検討…①アイリスグラウンドの改修、②学園創立125周年記念事業との連携

学校関係者評価に関する事項

（１）委員会の構成　（敬称略）

〇向坂 正佳（守山市教育委員会教育長）	〇大崎 裕士（守山商工会議所会頭）
〇眞下　忠（神港精機株式会社取締役社長）	〇亀田 晃巌（唯明寺住職）
〇松浦　博（滋賀医科大学学長）	〇高山　茂（立命館大学理工学部長）
〇久野 信之（立命館一貫担当常務理事）	〇堀井 美津江（立命館守山中学校・高等学校PTA会長）
〇西村　慧（同・早苗会会長）	〇寺田 佳司（同・校長）

（２）委員会開催日程、主な議題

〇第１回　2022年６月23日（木）10：30〜12：00

〇第２回　2023年４月28日（金）オンライン実施

（３）評価・改善事項

①「自律した学習者の育成」との明確な目標を掲げ、学びのあり方や評価を見直し、改革を進めている点は高く評価できる。

②①の実現に向けては、すべての教職員で課題や目標を共有・理解し、学校全体として組織的に取り組んでほしい。

③「社会実装の学び」「個別最適な学び」などの先進的な取り組みの成果やノウハウを、ぜひ他校にも普及させてもらいたい。

④校内研修の実施計画を整備し、組織的・継続的な研修を推進することで、教職員の学ぶ意欲や向上心を喚起できている。

⑤教育DXを推進すればするほど、教員・生徒・保護者とのコミュニケーションが必要だということを意識したい。

⑥入試結果からも、学校ブランドがしっかり確立できており、受験生や保護者からも高い評価を得ていると判断できる。